

ジョン・万次郎

(ジョン・まんじろう)

江戸時代末期から明治時代に至る時代は、日本が封建国家から近代国家へ移行する興味深い段階である。1840年頃の日本はまだ鎖国時代で、日本人が外国に出ることは許可されていず、外国との交際は一切禁止されていた。その頃四国のある村に、万次郎という若者がいた。彼は魚をとって暮らしていたが、ある日暴風雨のために、誰も住んでいない島に流されてしまった。島の近くを通る船も時にはあったが、どの船も彼に気がつかなかった。

半年くらいしたある日、万次郎はアメリカの船に救助された。船長は、万次郎は非常に頭が良いが日本で教育を受けたことがない、ということを知り、是非アメリカで教育を受けさせたいと思った。万次郎に相談したところ、万次郎も同意したので、一緒に連れて帰った。船長の家はマサチューセッツのフェア・ヘブンという町にあり、万次郎はそこで学校に入り、日本人として初めて西洋の進歩した教育を受けることになった。その頃のアメリカは、平等の思想が、十分には広まっていません、人間の間には差別があり、特に東洋人を低く見る傾向があったために、万次郎を野蛮な人間のように取り扱う人々やさも人間でないかのように無視する人々がいた。しかし、勤勉な万次郎は彼なりに一生懸命勉強し、優秀な成績をとった。彼は十年近くアメリカにいたが、船長夫婦の個人的な信頼を受ければ受けるほど、四国の田舎で一人で暮らしている母親のことを懐かしく思い出すようになり、ついに日本に帰る決意をした。

当時外国に出た者は幕府の厳しい調査を受けることになっていたもので、万次郎も日本に戻った時、いろいろ調べられた。法律上十分な理由がない場合は死刑になるのが普通だったが、彼の場合は漂流という避けられない事情だったうえに、幕府のなかに西洋の文明・文化に関心を持ち、万次郎の話を知った人がいたので、彼は自由になった。

彼は、自分自身のアメリカでの経験からいって、日本の技術的水準が高くない限り、この世界の複雑な競争において日本の発展はあり得ないと強く認識していたので、幕府の指導者や大名達に、開国して西洋の発達した文明・文化を輸入する必要性を説明せずにはいられなかった。彼の主張を無意味なことと見なした人もいたが、日本の将来にとって何と貴重な話だろうと感心して、万次郎に同調する進歩的な大名や知識人も少なくなかった。

万次郎は、一方においては、開国の重要性を説明し、日本の近代化に尽くしたが、他方においては、西洋の書物を何冊も日本語に翻訳して西洋の近代科学を普及させた。また、明治維新になってからは、東京大学で英語を教えながら、自分の経験を基にして、新しい日本の指導者となるべき若者達に、近代国家として日本が生き延びねばならぬということを熱心に語った。

に至る - indtil	さも - ekstremt	限り - grænse; med neg: med mindre
封建国家 - feudalstat	無視 - ignorere	複雑な - kompleks
段階 - fase, stadié	勤勉な - flittig	競争 - konkurrence
鎖国 - national isolation	彼なりに - på sin egen måde	あり得ない - umulig
許可 - tilladelse	優秀な - exceptionel	認識 - anerkende
されていず = されていないで	成績 - karakter	せずにはいられない =
交際 - tæt relation	個人的な - individuel, personlig	なくてはいけない
一切 - fuldstændig (med neg)	信頼 - tillid	開国 - åbne andet op
禁止 - forbudt	調査 - undersøgelse	主張 - overbevisning
暴風雨 - storm	法律(上) - (i henhold til) loven	無意味 - nonsens
救助 - redde	死刑 - dødsstraf	見なす - betragte som
是非 - absolut	漂流 - drive til søs	同調 - være enig
平等 - lighed	避ける - undgå	知識人 - dannede mennesker
思想 - idé	事情 - grund	一方においては / 他方に
十分には - tilstrækkeligt	文明 - civilisation	おいては - på den ene / anden side
差別 - diskrimination	Xからいって - fra X's synspunkt, in terms of	尽す - gøre ngt indgående
傾向 - tendens	技術的 - teknisk	普及 - brede sig
野蛮な - barbarisk	水準 - niveau	生き延びる - live længe
取り扱う - behandle		

えど じだい まつき めいじ じだい いた じだい にほん ほうけん こっか きんだい
江戸時代末期から明治時代に至る時代は、日本が封建 国家から近代
こっか いこう きょうみぶか だんかい ねんごろ にほん さこく
国家へ移行する興味深い段階である。1840年頃の日本はまだ鎖国
じだい にほんじん がいこく で きよか がいこく こうさい
時代で、日本人が外国に出ることは許可されていず、外国との交際は
いっさいきんし ころしこく むら まんじろう わかもの
一切 禁止されていた。その頃 四国のある村に、万次郎という若者がい
かれ さかな く ひ ぼうふう だれ
た。彼は魚をとって暮らしていたが、ある日暴風雨のために、誰も
す しま なが しま ちか とお ふね とぎ
住んでいない島に流されてしまった。島の近くを通る船も時にはあつ
ふね くれ き
たが、どの船も彼に気がつかなかった。

はんとし ひ まんじろう ふね きゆうじよ
半年くらいしたある日、万次郎はアメリカの船に救助された。
せんちょう まんじろう ひじょう あたま よ にほん きょういく う
船長は、万次郎は非常に頭が良いが日本で教育を受けたことが
し ぜひ きょういく う おも
ない、ということを知り、是非アメリカで教育を受けさせたいと思つ
まんじろう そうだん まんじろう どうい いっしょ つ
た。万次郎に相談したところ、万次郎も同意したので、一緒に連れて
かえ せんちょう いえ まち
帰った。船長の家はマサチューセッツのフェア・ヘブンという町に
まんじろう がっこう はい にほんじん はじ せいよう しんぽ
あり、万次郎はそこで学校に入り、日本人として初めて西洋の進歩し
きょういく う ころ びようどう しそう
た教育を受けることになった。その頃のアメリカは、平等の思想が
じゅうぶん ひろ にんげん あいだ さべつ とく とうようじん
、十分には広まっていず、人間の間には差別があり、特に東洋人を
ひく み けいこう まんじろう やばん にんげん とりあつか
低く見る傾向があつたために、万次郎を野蛮な人間のように取り扱う
ひとびと にんげん むし ひとびと きんべん
人々やさも人間でないかのように無視する人々がいた。しかし、勤勉
まんじろう くれ いっしょうけんめい べんきょう ゆうしゅう せいせき くれ
な万次郎は彼なりに一生懸命 勉強し、優秀な成績をとつた。彼
じゅうねん ちか せんちょう ふうふ こじん てき しんらい う
は十年近くアメリカにいたが、船長夫婦の個人的な信頼を受ければ
う しこく いなか いちにん く ははおや なつ
受けるほど、四国の田舎で一人で暮らしている母親のことを懐かしく
おもいだ にほん かえ けつい
思い出すようになり、ついに日本に帰る決意をした。

とうじ がいこく で もの ばくふ きび ちょうさ う
 当時外国に出た者は幕府の厳しい調査を受けることになっていたの
 まんじろう にほん もど とき しら ほうりつじょうじゅうぶん
 、万次郎も日本に戻った時、いろいろ調べられた。法律上 十分 な
 りゆう ばあい しけい ふつう かれ ばあい ひょうりゆう
 理由がない場合は死刑になるのが普通だったが、彼の場合は漂流
 さ じじょう ばくふ せいよう ぶんめい
 という避けられない事情だったうえに、幕府のなかに西洋の文明・
 ぶんか かんしん も まんじろう はなし き ひと くれ
 文化に関心を持ち、万次郎の話 を聞きたがった人がいたので、彼は
 じゆう
 自由になった。

かれ じぶん じしん けいけん にほん ぎじゅつてきすいじゅん
 彼は、自分自身のアメリカでの経験からいって、日本の技術的 水準
 たか かぎ せかい ふくぎつ きょうそう にほん はってん
 が高くない限り、この世界の複雑な競争において日本の発展は
 え つよ にんしき ばくふ しどう しゃ だいまようたち
あり得ないと強く認識していたので、幕府の指導者や大名 達に、
 かいこく せいよう はったつ ぶんめい ぶんか ゆにゆう ひつようせい せつめい
 開国して西洋の発達した文明・文化を輸入する必要性を説明 せずに
 くれ しゅちょう むいみ み ひと
はいられなかった。彼の主張を無意味なことと見なした人もいたが、
 にほん しょうらい なに きちょう はなし かんしん まんじろう
 日本の将来 にとって何と貴重な話 だろうと感心して、万次郎に
 どうちょう しんぽ てき だいまよう ちしき じん すく
 同調 する進歩的な大名 や知識人も少なくなかった。

まんじ ろう いっぽう かいこく じゅうようせい せつめい にほん きんだい
 万次郎は、一方においては、開国の重要 性を説明し、日本の近代
 か つ たほう せいよう しょもつ なんさつ にほんご ほんやく
 化に尽くしたが、他方においては、西洋の書物を何冊も日本語に翻訳
 せいよう きんだいかがく ふきゅう めいじいしん
 して西洋の近代科学を普及させた。また、明治維新になってからは、
 とうきょう だいがく えいご おし じぶん けいけん もと あたら にほん
 東京 大学で英語を教えながら、自分の経験を基にして、新しい日本
 しどう しゃ わかものたち きんだいこっか にほん いきの
 の指導者となるべき若者 達に、近代 国家として日本が生き延びねば
 ねっしん かた
 ならぬということを熱心 に語った。